

家具新聞

(2019年1月1日)

「壁がドアに」は和の発想

枠のないドアを造作することはできませんが、フルハイトドアに出合った時、それを商品化していることに興味を持ちました。このアイデアを生かせば、施主さまへの提案の幅も広がると感じました。

住宅の中で生活感を帯びる箇所の一つは、廊下などの狭小スペースです。枠を無くし、壁と一体化することで、ドアの気配を消し、意識していることに視線が向きやすいクリアな空間をつくることができます。

設計者の立場から「ここを改良すればもっと良くなる」とお話しすることがありました。そうすると後日に突然「できました。シヨールームにお越しくださ

い」と既に展示品が出来上がっていました。指摘されたことを自社のフィルターを通して、圧倒的なスピードで対応するところに驚かされました。

坂倉建築研究所
建築家
永山 剛氏



海外でも十分に戦える

日本の文化には、障子やふすまのように壁にも扉にもなる発想がベースとしてあります。私見ですが、フルハイトドアはそれを現代的な解釈で表現されていると思っています。これからの住宅を考えると、壁が扉になるという発想の原点は、大きな可能性を持っています。それを海外のニーズに合わせてアップデートすれば、十分に戦えるのではないのでしょうか。

会社のビジョンと社長の決断力、社員の姿勢が三位一体となったチャレンジ精神、それが神谷コーポレーションさんの最大の武器で魅力だと思います。